

「人は繋がっていく」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ サンフランシスコからのお客様

『音楽は世界の共通語』そう信じ、彼らは日本を訪れました。米国サンフランシスコのサラトガ高校、リンブルック高校の生徒達により構成されたオーケストラ&バンドと混声合唱団。総勢 510 名による日本文化交流ツアーとのこと。6月12日に来日し、神奈川や東京での高校、大学との交流活動を皮切りに、富士山の麓での音楽フェスティバルに参加し、その後に彼らは神戸市にやってきました。

この日の前日、オーケストラは滝川第二高校の吹奏楽部と交流、一方、この日、混声合唱団の交流相手として選ばれたのが本校合唱部でした。まずは本校から4曲を披露。そのなかの一曲は私にとっては思い出深い『きみ歌えよ』でした。この歌について触れた過去の通信を添えておきます。読んでくださると嬉しいです。



続いて登場したのがサラトガ・リンブルック合唱団です。『ほたるこい』や『五木の子守歌』といった日本の歌を交えての全9曲。そのラストは本校合唱部員も加わっての『にいちちゃんのランドセル』でした。この曲は1995年の阪神・淡路大震災により小学校1年生で命を落とした男の子について書かれたノンフィクション書籍から生まれた歌です。

10か月ほどしか使っていなかったランドセルは真新しいままでした。そのランドセルをやがて生まれた弟が、兄の思いを繋ぐように背負って生きることを心に決める、そんな歌です。ここ神戸の街で、国境を越えた仲間とともにこの歌を歌うこと自体が意義深いことですし、歌声も琴線に触れる実に素敵なものでした。



合唱による交流を終えた後はプレゼント交換などの時間。PTAの方に託された「神戸高校タオル」も贈り物として喜んでいただきました。ともに別れを惜しみながらも訪問団の方々はこの日のうちに最後の訪問地、広島へ。10日ほどに渡る日本での滞在が忘れがたいものとなることを祈るとともに、この日まで準備、練習に励んでくれた合唱部の皆さんと、その傍らで受け入れ準備から当日の指揮に至るまで、ひたむきに取り組んでくれた久保先生にただただ感謝の1日でした。

『国境を越えて通じ合う』神高生の姿を見せていただいた私は、ほんの4日前のことを思い出していました。本校ラグビー部の「創部100周年記念式典」に参加させていただいたのです。会場に集まっていたのはOB、現役生、関係者ら約330名。私は来賓の1人として壇上から祝辞を述べさせていただいたのですが、集まる視線の強さはかなりのもので、数千人から見つめられて話した過日の本校130周年記念式典よりも緊張しましたね。つい「あの日以上の圧を感じます」と感想を漏らしてしまい、会場は笑いに包まれました。



自分たちが積み重ねてきた過去への誇りと、それが今現在の自分に繋がっているという自負、そして常に支えてくれた仲間や恩師、保護者といった周りの方々への感謝とが具現化して、1人ひとりが眩しいほどの光を放っているのです。あの光景を目前にしてマイクを持つという経験はなかなかできるものではありません。埜田先生と主将の後藤くん、そして私は得難い経験をさせてもらいましたね。

OB会長は「先輩たちのレガシーと現役生の頑張りで、記念すべき年に全国大会出場を果たしてくれて嬉しい」とご挨拶されました。また、後藤くんは決意として「次の世代に誇りをもって引き継げるチームでありたい」と語り、万雷の拍手を浴びていました。『世代を越えて通じ合う』神高生の姿。人はこうして繋がっていくのですね。



「きみ歌えよ」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 始業式を前に

名指揮者でもある能島先生に誘っていただいたのです。神戸高校合唱部のホームコンサート。今年はずでに香川県で開催される全国総合文化祭への出演を要請されている兵庫県を代表する合唱部のひとつです。これまでの仕事柄、そのステージは何度も見せてもらっていましたが、本校講堂を利用して、先輩たちと繰り広げるプログラムは当然ながら見たことがありません。私は興味津々でした。



果たして当日は無伴奏混声合唱あり、ミュージカルあり、大久先生が歌うシーンありと、バイタリティを見せつけてくれました。念願の関西大会突破に向けて、よいスタートですね。私はその余韻の中で8日の始業式の式辞原稿を少し軟らかめに変えました。格式が必要な入学式の式辞との差別化をはかりたくなったのです。

○ 始業式で生徒に伝えたこと

桜の季節なので、まずは桜の話から入りますね。

桜は満開となったあと、華々しく散ります。そのあと、夏には花の芽を作ります。その花の芽ですが、ある程度まで成長すると、冬の初めにはいったん眠りに入るそうです。成長も止まります。そうして、しばらく休んだあと真冬の寒さによって眠りから、ふっと目を覚まします。これが「休眠打破」です。

目覚めた花の芽はその後、春の暖かさとともに再び成長を始め、やがて開花します。桜はどこか私たち人間と同じなのかもしれませんね。花を開くために、まずは夏の暑い日に自らを鍛えるのです。勉強でも部活動でもそうですよね。しんどい思いをしないで成長することなど不可能です。

でも、ある程度まで成長したら、そこで休眠する、つまり休むことも必要なのです。そのうえで、しっかりと厳しい冬の寒さ、つまり思い通りにいかないことを経験して目が覚め、そこで一気に花を咲かせることができるそうです。

鍛えないと人は強くなれません。でも、たまに休まないで心が折れてしまいます。「自分は弱い」「あいつには適わない」と思うことは大切。でも、それで落ち込む必要はありません。最終目標は自分らしい、自分にしか見せられない花を咲かせることなんです。長い目で見てそれぞれがいつか花を咲かせられるように。

これこそが本校の前身である神戸尋常中学校時代から引き継がれてきた「鍛錬主義」のめざす姿だと思います。やがて咲き誇る日のために、ひとりひとりがしっかりと「進化をめざしてもらえたら」それが私から皆さんへのひとつめのお願いです。



ふたつめです。今、グローバル化や技術革新の進展など、時代は激しく変化しています。また、多発する自然災害や地球温暖化、国際情勢の不安定化についても日々、報道がなされています。

あふれる情報を耳で聞き、あるいはあふれる映像を目にして、皆さんは何を思いますか。「大変だな」「この先はどうなるのだろう」という感想だけでしょうか。今、世界は解決しなければならない様々な課題に直面しています。やがて皆さんは、それぞれの立場でこれらの解決を担う世代となるでしょう。

そのために今が力を蓄える時です。しっかりと学び、しっかりと人格を磨き、社会の第一線に躍り出たときには十分な力を発揮できるよう、成長するべき時は今です。ここに皆さんが神戸高校で学ぶ意味があります。学ぶのは自分のためであり、社会をよりよくするためでもあるのです。

そこで近年、私が気になっているのは人と人の分断です。世界のいたるところでこの分断が見られます。自分の意見に固執する人が多いため、ひとつの結論にたどり着くことができない、かくして分断は混乱を招きます。そのような時、求められるのは誰からも認められるリーダーの存在ではないかな、そう思っています。

では、具体的にリーダーの資質とはどのようなものか。何より大切なのは人間的魅力です。「この人とともにありたい」そう思わせる安心感です。そこで覚えておいてほしいのは、これまた本校の前身、神戸尋常中学校から引き継がれてきた四綱領のなかの「自重自治」の精神です。

「自重自治」とは自らの使命を重んじ、品性を保ち、自らの定めによって自らの行為を律することを言います。自らのやるべきことに真摯に取り組み、私利私欲に走ることはなく、常に自分がどのように見られているかを意識して行動できる存在。そんなリーダーは人と人とを繋ぐ存在となり得るでしょう。

実に魅力的です。皆さんには、そのようなリーダーとなれるよう、「しっかりと人格を磨く」日常を過ごしてもらえたらうれしいな、そう思っています。これが2つ目のお願いです。

最後のお願いはいたってシンプルなものです。「自分の生命と他人の生命を大切にしてください」ということです。私がかつて働いていた教育委員会では、県立高校生の誰かが生命を落とすと、必ず連絡が入ってきました。亡くなった生徒の日常を私は知りません。それでも哀しくなるのが常でした。では、そのそばにいた友人は何を思うでしょう。育ててきた保護者の方は何を思うでしょう。

自分の生命と他人の生命と同様に大切にしてください。これが3つ目のお願いです。「しっかりと進化をめざす」「しっかりと人格を磨く」そして「生命を大切にする」。私からのお願いは以上です。

午後からの入学式では、同じ内容を少し格式高くして仕上げ、新1年生に伝えました。式典中の校歌が実に素晴らしく、来賓としてご出席いただいた同窓会長からは「声も出ているし、とてもきれいに歌えていて感動した」とのお言葉もいただきました。歌唱指導にあたってくださったメンバーに大感謝ですね。



文化部による歓迎演奏は来客対応があり、電子オルガン部の演奏は残念ながら少ししか見られませんでした。吹奏楽部はじっくり見させていただきました。歌ありダンスありの迫力あるステージ。指揮者が講堂後方から指揮するというスタイルも新鮮でした。

式の後には学年主任の榎本先生から保護者の方に「比べないであげてください」というお話がありました。友人や兄姉、くわえて過去の本人と。おそらく多くの1年生がこれまでエース級の活躍を見せていたことでしょう。それでもエース級が集まると、その中で1番もあれば300番もあります。平均点を下回るテストに落ち込むこともあるでしょう。そんなとき、支えてくれるのは先ずもって、ご家族のご理解ですものね。

保護者の方も聞き入っておられました。さらに榎本先生からは、「私が信頼できる仲間が集まっている学年団です。どうか信頼してください」という話もありました。その思いも届いたことと思います。

○ 『きみ歌えよ』

すべてが終わった後、私の脳裏に浮かんだのは、冒頭に書いたホームコンサートの日のことです。あの日、演目が終わって講堂を出ると、背後から歌声が聴こえました。合唱部の生徒がバルコニーから歌声で見送ってくれていたのです。曲は谷川俊太郎の詩にメロディをつけた『きみ歌えよ』。

哀しいことやつらいこともあれば、うれしいことも好きなこともあります。その折々の思いを洗いざらい歌えば、誰かと思いを分かち合える、という詩です。『そんな高校生活が待っていますように』、1人そう祈った私です。

